

天文学とプラネタリウム

第129回



今月のお題

全国プラネタリウム研修会への参加



日立で行われた日本プラネタリウム協議会の研修会に参加してきました！

2015年は国際光年。天プラもなにかします。



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)

平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

茨城県日立市にある日立シビックセンター。そこで行われた全国プラネタリウム研修会（日本プラネタリウム協議会主催）に参加してきました。私が参加したのは、3日間の研修の最終日に行われた「プラネタリウムにできること～分野を超えて見出す無限の可能性」というセッションに、講演者として招待していただきました。無限の可能性…ううむ、大きなタイトルだ、なんて天プラ向きなんでしょう。

思えば、天プラの活動がスタートしたのも、プラネタリウムがきっかけでした。今を遡ることおよそ11年前、渋谷にあった五島プラネタリウムや池袋にあったサンシャインプラネタリウムが相次いで閉館するという、天文教育普及業界にとっては衝撃的なできごとがありました。これに危機感を抱いた関係者が集まり、国立科学博物館の新宿分館にて研究会「プラネタリウム館の役割を考える」が開催され、そこに大学院に入りたてだった当時の私たちも参加したのが、そもそも天文学とプラネタリウムの関係を考えるきっかけになったのでした。

さて、いま改めて天文学とプラネタリウムの

関係を考えて時、いったいなにが言えるのか。結論から言えば、プラネタリウムは天文学にとって、なくてはならない場所になったと私は言いたいです。現代は天文学の意義がわかりにくい時代です。138億光年先の宇宙が、私たちの日常にいったいなんの関係があるのか。なんかすごいことやってるけど、自分とはあんまり関係ない。天文学を敬するけど遠ざける、そのような状況にあると思います。

これは、天文学の立場から言えばたいへんもったいない状況です。太陽系外惑星やダークエネルギーの発見は、私たちの世界観を根底から変える可能性を秘めた、人類史上でも指折りの重要な研究です。このような研究が人々にとってどのような意味を持つのか。それを知るためには、私たちの日々の暮らしの中に天文学を編み込んでいく必要があります。

そのための場所としてもっとも適している場所が、プラネタリウムだと私たちは思うのです。プロジェクター投影によるデジタルドーム化は、プラネタリウムは星だけを映し出す空間から、星を含むこの世界全てを映し出せる可能性を秘めたドーム空間へと変貌させました。天文学だ



セッションで登壇する高梨（右端）。

けでなく、他の学術や文化、芸術など、ありとあらゆるものを融合できる可能性を持った空間です。日本全国に300館以上ある館それぞれが、投影や普及活動によって人々との対話を積み重ねながら、その地域の文化に根ざしたユニークな宇宙観を創り上げる場所だと思えば、そこに広がる可能性はまさに無限と言えるでしょう。

天文学の意義を見つける場所としてプラネタリウムの使い方をデザインする。プラネタリウムに根ざした活動からスタートして10年以上が経った今、改めてプラネタリウムへの認識を新たにしたい今回の日立研修は、私たちにとっても得るものが大きかったのでした。がんばろう。